

### 服部 力

服部都市建築設計事務所会長  
(1級建築士、工学博士)

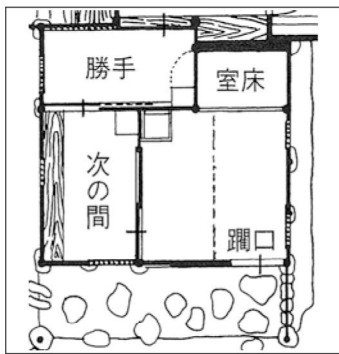
建築設計実務に携わり53年になる。多様な建築物の設計を担当し、その中には一般の建設業には数少ない「茶室」などの和の建築物もある。これまで茶室8件、能や日本舞踊の舞台2件、寺の庫裏など数寄屋風建築15余件がある。中でも苦労したのが「茶室」。流派の異いが色濃く、建築の根本的な問題について専門家に尋ねても明確な解答が得られないため、不本意ながら通例に従い設計を行った。なぜ、そうだったのか。茶の湯の基本であるおもてなしの作法とその実践の場である設えで、「茶室造り」に矛盾を感じていたので。

その代表例が茶室の原点とされている待庵の設え。どんな高貴な客人であれ、客は庭の踏み石から22寸以上も離れた高い茶室の床に這いつくつて入る躡り口(幅約65寸、高さ約78寸)を潜らなければならぬ。一方、客を迎える亭主は直立で勝手口から入り、客前を通り床柱に近い上位の敷居屋風建築15余件がある。お手前席に座す。床の間の生け花は一輪挿しの花筒で、正



## 利休の茶室待庵とおもてなし

座する客の目線より高い位置にある。さらに、質素簡潔を旨とする設営の庵でありながら、小二帖の空間に、なぜ天井だけ手の込んだ3種類もの重厚な仕組みになっているのかなど、疑問点は多い。茶の湯は「亭主七分に客三分」「独座観念」など、禅や芸術の教義を背景にした自己修養の側面を大切にしている。招いた客がどれほどの満足を感じるかということよりも、もてなす側の満足を重視する。特に利休の「詫び茶」は、無駄なものは一切削ぎ落とした



利休の待庵 平面図

1 邸茶室 勝手口

現代の茶室にそれを反映させて良いのか。招待客に100%満足して頂くという西洋サービスに慣れ親しんだ現代人に馴染むのか。私はいろいろと悩んだ末、利休ではなく、「綺麗さび」を説く小堀遠州のおもてなしの心を設計に取り入れることにした。遠州は茶室に入りやすくなるため、入門口を幾つも用意し、グループの人数によって対応できる最小三帖から四帖半、六帖等幾部屋も用意した。さまざまに興味の人々を茶会に招き、「本来の表裏無し」の和やかな時間を共有できる空間を目指した。そうした客人に対する「おもてなしの気持ち」を設計に反映させた。これは茶室に限らず、私の設計思想の基本でもある。